

グリーン四国

四国森林管理局



高知市丸ノ内1丁目3-30
TEL 088 - 821 - 2000 四国山の日
FAX 088 - 821 - 4834
ホームページアドレス <http://www.shikoku.kokuyurin.go.jp>
電子メール shikoku_soumu@rinya.maff.go.jp

No.1062 2008年9月号

四国の森づくり子どもサミットを開催

四国4県から8校が参加し、各学校の活動報告や森林環境教育の推進に向けての意見交換等を行いました。

(関連記事は2頁へ掲載)



学校が取り組んでいる活動報告の様子



意見のとりまとめの様子



水生昆虫や魚の採取の様子



「グリーン四国」に使われている紙は、日本の森林を育てるために間伐材を積極的に使用しています。



環境に配慮した植物性大豆油インキを使用しています。

「日本の木を使っていく」「きれいな川のために森を大切にする」等の子どもからの意見

「四国の森林づくり子どもサミット」を開催

〈指導普及課・ふれあいセンター〉

八月二十六、二十七日の両日、四万十市西土佐の四万十楽舎を会場に、「四国の森林づくり子どもサミット」を開催しました。

サミットには、四国四県の小学校五校、中学校二校、高校一校から、三十五名の児童・生徒と十三名の先生が参加しました。

この取組は、平成十八年度より選定、表彰している「四国山の日賞」のうち、これまで



参加した各学校同士の交流

で森林環境教育分野を受賞した学校や森林環境教育、活動に積極的に取り組んでいる学校等を対象に、各学校が取り組んでいる活動報告や、今回のサミット開催に合わせて、ふれあいセンターが作成した学習教科補完プログラムの実践活動、森林環境教育の推進に向けた意見交換を行うとともに、子どもの視点からみた四国の森林づくりへの提言についての検討を行いました。サミット初日は、各校から



活動報告の様子

の活動報告に始まり、土壌に棲む生物観察、立木の炭素現存量調査を二グループに分かれて学習活動を行いました。子どもたちは、今まで観たことのない昆虫の生態に驚きながらも、昆虫が果たしている役割の話に真剣に耳を傾けていました。また、炭素現存量調査では、悪戦苦闘しながらも一本の木が貯蔵している二酸化炭素量を算出し、その量の多さに驚いていました。

二日目は、四万十川の支流「北ノ川」で水生昆虫の採取・観察を行いました。網を使って自ら採った昆虫や魚などを観察しながら、日本最後の清流と言われる四万十川の生物



魚等の水の生物の説明



進行役の小林修先生による意見交換会

種の豊かさや、名前の由来などに感心していました。

その後、四万十楽舎に場所を移し、森林環境教育の推進に向けた意見交換、四国の森林づくりの提言についての検討を行いました。

意見交換会は、愛媛大学農学部森林教育特任講師の小林修氏がコーディネイトし、子どもたちに「みんなが考える森林とは、どんな森林ですか」「森林の中でやってみたい活動や体験は何ですか」の質問に、日頃、思い描いている森林の姿や体験してみたいと考えている遊びや活動を紙に書き、それを模造紙に貼り付けてい

きました。

最後に、「みんなが考えている森林を育て、守っていくために、今日からできることは」の問いに、「日本の木を使っていく」「植樹や下草刈りに参加する」「動物たちの棲みやすい環境のため、ゴミを捨てない」「きれいな川のために森林を大切にする」などの意見が出されました。

四国森林管理局では、子どもたちによる意見等を基に、近日中に、子どもたちによる「四国の森林づくりへの提言」としてまとめ、公表していくとともに、来年度の業務に反映していきます。



意見交換会でのとりまとめの様子

国有林防災ボランティア協定を締結

〈治山課〉

近年、国民の防災ボランティア活動への関心は一層高まりを見せており、個人や団体がそれぞれの能力や特性を活かし、災害被害の軽減に向けた社会貢献活動に取り組み事例が増えています。

一方、集中豪雨等による山地災害の多発化・激甚化、大規模地震発生等の危険性等が指摘されており、国有林野においても引き続き大規模災害による被害の発生が懸念されています。

こうした中で、国有林野内で発生した山地災害等の情報を収集する際に地域の森林土木技術者等をボランティアとして活用し、より迅速かつ円滑な災害対



調印式の様子



協定書を手にする左：山中会長 右：中山局長

策の実施及び地域住民の意識の向上を図ることを目的として、国有林防災ボランティア制度が創設されました。

これを受け、当局においても国有林防災ボランティアの受け入れ体制を整備することとし、本制度に関する協定の相手方を一般公募により募っていました。八月二十五日に「四国森林管理局における国有林防災ボランティア制度に関する協定」を（社）高知林業土木協会（山中巨司会長）との間で締結しました。同協会は、四国四県から約三五〇名の国有林防災ボランティアを登録する予定であり、当局及び各森林管理署等と連携を図りつつ、その経験や知識を活かして、国有林野内における災害発生に関し迅速な情報収集活動を展開することとしています。

「第一回国有林モニター勉強会」を開催

〈企画調整室〉

八月二十一日、徳島森林管理署管内の名頃谷山国有林などにて、本年度「第一回国有林モニター勉強会」を開催しました。当日は時折小雨の降るなか、四国四県から国有林モニター十名の方が参加しました。

まず、現場へ向かうバスの中で、徳島森林管理署長から徳島森林管理署の概要について、その後、標高一、三〇〇m付近の天然林内で、四国森林管理局計画課経営計画第一係長から天然林や緑の回廊についての基本的な説明を行いました。

さらに、緑の回廊内の動植物の生息状況等を把握するためのモニタリング調査に携った金澤



天然林や緑の回廊についての説明



モニタリング調査での使用機材の説明

文吾氏（特定非営利活動法人四国自然史科学研究所センター理事）から、ツキノワグマが緑の回廊を活動域としており、ツキノワグマの生息地保護に果たす緑の回廊の役割等について話がありました。参加者は、ツキノワグマ（ヌス）に付けていた調査用の発信機付き首輪を実際に自分の首に巻いてみて「首周りが細いねえ。」と美感し、「ツキノワグマの冬眠場所は毎年同じなのか。」といった質問をし、「そうとも限らないようだ。」との講師の説明に熱心に耳を傾けていました。

その後、民有林内で徳島森林管理署が実施している治山工事を見学し、徳島森林管理署治山



治山工事实行箇所での説明

課長から、当該工事は、現地にある種子を採取し吹き付けて元の植生に戻す工法を採用しており、発生した植生により法面（のりめん）保護効果が見られるものの、カモシカと見られる害害があり、標高も高いことから、森林への移行が低地に比べ遅くなりがちである、などの説明がありました。治山工事により早期に森林に戻す重要性やその困難さについて、実際に現場を見ることで、より実感できました。

最後にモニターの方々からは、「国有林の緑の回廊や治山工事等の取組について、もっとPRすべき。」といった声が寄せられました。勉強会で寄せられた意見は、今後の取組の参考にしていくこととしています。

森林ふれあい推進事業を実施

天空の爽回廊(セラピーロード)と天然記念物「大引割」を訪ねて

〈指導普及課〉

第二回森林ふれあい推進事業を十九名の参加のもと六月二十八日に開催しました。

目的地の一つは、カルスト

台地とそこに放牧されている牛、栲原町をあげて地球温暖化防止対策に取り組むために設置された、風力発電の風車二基が織り成す叙情的な風景が広がる姫鶴平。現地に着くと、それまで一面に立ち込めていた霧が晴れ、三六〇度の大パノラマに感動してい



セラピーロードの効用を体験した参加者

ました。

その後、セラピーロードの起点にある天狗荘に移動し、昼食と森林教室を実施しました。

森林教室では、セラピーロードの効用、周辺林分に生育する植生、ブナ二次林の話等について高知大学講師の黒岩和男先生がわかりやすく説明しました。

午後からは、全員で足腰などのストレッチを行った後、天然記念物大引割(有史以来の地殻変動、又は地震により生じた幅八m、深さ三〇m、長さ八〇mの岩石の割れ目)を指して出発しました。途中、竹、ススタケ、ミヤコザサなどの見分け方やキリンソウ、タチツボスミレ、ホウチクソウなどの名前の由来、エゴノキや、ヒメシヤラなどを観察しながら、一時間五〇分かけて、大引割に到着しました。

この日は、ちょうど梅雨の最中であつたことから、散策途中から大粒の雨が降ってきましたが、幸い、セラピーロードは広葉樹の葉で被われて

おり、雨を受止めてくれ、合羽も着ることなく無事イベントを終了することができました。樹木が雨を受け止め、幹を伝って徐々に地上へと流し、洪水を防止しているという役割を学ぶなど、この雨も森林教室の教材となってくれました。

森林ふれあい推進事業のイベントに初めて参加された方からは、「良いイベントに参加させてもらいました。歩きやすいし、心が癒されました。」などの感想がありました。

技術開発の普及の

取組を紹介

〈公開講座を開催〉

〈森林技術センター〉

七月二十三日、「ヤナセスギを次代へ」森林技術センターの取組」と題して当センター主催による公開講座を馬路村魚梁瀬で開催しました。

この公開講座は、技術開発を一般の方々にも理解してもらうことなどを目的に実施したもので、林立するヤナセスギの雄大さと美しさを肌で感



千本山試験地内での説明の様子

じてもらい、さらに後世にこのヤナセスギ林を引き継ぐために当センターが実施している天然更新技術の確立の重要性を理解してもらう初めての試みに、一般公募の小学生とその保護者十一名が参加しました。

当センターの和田山天然更新試験地は、美しい森林づくりのモデル的取組にも選定されていますが、日帰りでは日程的に厳しいこともあり、比較的近くにありヤナセスギの天然更新を研究している森林総合研究所四国支所の千本山試験地で天然更新の取組を紹介しました。

そこでヤナセスギの特徴、

後世に伝えることの重要性、天然更新の難しさを学んだ後、それぞれでヤナセスギの稚樹を観察しました。子供たちは、スギの赤ちゃん(稚樹)を見つけたら、シカの糞を見て、かなり興奮気味でした。

その後、千本山登山口に移動し、魚梁瀬山の案内人と千本山登山を開始しました。

ヤナセスギの大木を前に、感嘆の声をもらす参加者もみられ、ヤナセスギの歴史を学びながら、千本山の醍醐味を味わいながら、後継樹の無い現状を目の当たりにして、天然更新技術の重要性を実感したようでした。

参加者からは、「普段体験できないことを子供に体験させることができ、大変有意義な企画でした。」「ヤナセスギのことがいろいろ知れてよかったです。」「とてもよい企画だが、もっと多くの人にヤナセスギを知ってもらえるよう、PRの仕方を工夫したら良いのではないか。」等の貴重な意見をいただき、充実した公開講座を行うことができました。

帰りのバスでは、さすがに疲れたせいかわ、子供たちはお土産の木工品を大事そうに抱え、ぐっすりでした。



安芸署での研修会

研修会では、壊れにくい作業路網作設技術の向上を図る観点から、その基本である表土ブロック積工法の実演指導や、水処理対策の重要性、立木を利用した丸太組土留工の箇所での路側崩壊が発生しているのを踏まえて適切な設置方法、等についての説明を行い、参加者の皆さんからも活発な意見が出され作設技術向上に向けた有意義な研修会となりました。

四国局では、低コストな木材搬出のために壊れにくい作業路を作設する必要があることから、昨年度までは請負事業体等を対象として現地での検討会を開催してきました。平成二十年度については、局ホームページを利用して広く関係なく研修会への参加を呼びかけたところ、徳島署・香川所ブロック、嶺北署・高知中部署ブロック、愛媛署、四万十署、安芸署の路網を活用した素材生産請負事業の作業現地に四六社、総勢一二九名もの参加があり、七月二十五日から八月一日の間に各地で実施しました。



四万十署での実演指導



山下教授の講義の様子

今年度は、森林環境教育をより効果的に進めるため、平成十九年度における各署等の森林環境教育の取組を紹介し、意見交換を行うとともに、翌二十二日に行った「四国山の日賞選考委員会」の委員として来高された森林環境教育に造詣の深い京都教育大学山下

教授にアドバイスをいただくことを主眼として行いました。はじめに、指導普及課長から、「森林環境教育の目指す方向について」として、森林環境教育が生まれた背景・目的を改めて説明し、特に、教育・環境・地域振興等の異分野との連携による取組が重要であり、現状の「待ち型」から「提案型」への転換を図っていくことが必要であることについて、共通認識を深めました。

次に、山下教授を交えた各署等の取組紹介及び意見交換を行いました。取組紹介では、十八年度までは屋内中心で小学生を対象とした森林教室を実施していたが、反応が思わしくなかったことから、十九年度は森林組合と連携し屋外で森林教室を実施したところ、子どもたちの気づきが全然違ったとの効果や、天候に対する対応が不十分であったとの反省点などが出されました。意見交換では、山下教授から全体を通して、①コンセプト（ねらい）を明確にして実施し、それに対して評価・分析を行い、次回に反映させること、②木工教室の実績が多いが、単に材料を組み立てるだけで

八月二十一〜二十二日、森林管理署等の森林ふれあい係長等を対象に、「平成二十年度森林ふれあい担当者等会議」を開催しました。

は、元の木はこういうものというところを見せ、森林をイメージさせること、③募集や実施後においては、各種メディアを積極的に活用し、広くPRすることのアドバイスをいただきました。また、山下教授から、「国有林における森林環境教育の取組に期待するもの」と題した講義もいただきました。期待するもののポイントとして、①森林環境教育の重要性とあり方の普及・啓発、②学校教育における「森林」の掘り下げ、③子どもたちの森林のポイントの実現を掲げられました。具体的には、①では、森林環境教育は、森林の中の体験により、子どもの調べる力、感性を養うものであり、先生に関心の高い子どもたちの問題に通じるものであるが、森林の重要性等についての理解（知識）が不足している先生が多いことから、先生に対する啓発、問題意識の徹底を図っていくことが必要、②では、小・中学校の学年ごとに森林についての学習の扱いが異なることから、学年に応じた具体的な森林環境教育プログラムを学校に提示していく

ことが必要、③では、子どもについても先生同様に、森林に対する知識は不正確であることから、継続的な体験学習により、子どもの関心を持続させ、森林のとらえ方の是正を図っていくことが必要、④では、森林環境教育とは、森林を中心とした環境教育のことであり、環境教育のねらいである「環境問題の解決とよりよい環境の創造」を図っていくため、森林を「体験の場」、「知る場」、「かかわる場」としてとらえていくことが必要と強調されました。

今回の会議では、森林環境教育の重要性を再認識したところであり、今後、各署等における取組に活かされることが期待されます。

木を伐るって大変だ！

「建築士の卵」のための

森林環境教育

〈指導普及課〉

八月二十四日、高知県本山町の白髪山国有林（嶺北森林管理署管内）において、「建築士の卵」のための森林環境教育を実施しました。



間伐材体験の様子

この取組は、将来、木造住宅建築などの木材利用の推進役となり得る建築学科等に在籍している学生等を対象として、木造住宅設計、木材の特性、熱伝導率実験、地域材を利用した木造住宅見学などを行うことで、地域材の利用拡大に資することを目指す。四国森林管理局、高知大学（学生）、嶺北木材協同組合や（社）高知県建築設計監理協会、高知県、など、産・官・学が連携し、森から学ぶ木造建築等の設計士セミナー「森の未来に出会う旅」として平成十九年度から実施しているものです。

セミナーは、八月二十二日から二十八日までで、森林環境教育は、そのカリキュラムの一つとして間伐の体験を実施しました。

参加者は、全国の大学、地元の高知工業高校建築科から十六名が参加しました。

はじめに、現地で多田指導普及課長から、植え付けから伐採までの林業サイクルや新設住宅着工に占める木造の割合、木材自給率などを交え、美しい森林づくりを推進することや木材利用の必要性等の基礎的な知識について説明しました。

次に、スギの間伐体験に入りました。参加者は、建築学科等に在籍していても、森林に入ったり、ノコギリを使うことはほとんどないとのこと、汗を流しながら苦勞して伐り倒し、「山の作業の大変さを実感した、でも楽しかった。」「木の肌はツルツルしてとてもきれいな。」などの感想が聞かれました。

なお、この取組については、平成十九年度から二十二年度までの五カ年事業とし、全体で百名の受講者を確保することを目標としています。

もり 森林からのおくりものを使って 『親子ふれあい木工教室』を開催

〈指導普及課〉

八月二十五日、公募による親子二五組、三十五名が参加した「夏休み親子ふれあい木工教室」を、森林管理局の森林ふれあい館において実施しました。

この木工教室は、夏休みの研究・学習の支援と身近な自然環境への関心や理解を深めることを目的として、（財）オイスカ高知県支局と共催で、例年、夏休み期間中に小学生とその保護者を対象に開催しています。最初に、森林の役割や森林



作品作りに熱中する親子

からの恩恵についてわかりやすく解説された紙芝居「森林からのおくりもの」を使って森林教室を行いました。途中、「みんなの家や学校を思い浮かべて、木で作られたものには、どのようなのがありますか。」などと問いかけると、子どもたち元気よく手を上げ、次々と答えていました。

続いて、森林整備などで発生した小枝やどんぐりをベニヤ板の上に障害物に見立て、貼り付け、木球を転がせて遊ぶ「木球迷路」製作に取り掛かると、「木球が通り抜けない。」「小枝が上手く切れない。」と悪戦苦闘していました。なかには子ども以上に熱中する保護者もあり、親子が協力して完成させた作品は、どれをとってもオリジナリティに富んだ大作ばかりでした。作品を手にした子どもたちは、みな誇らしげに目を輝かせ、「学校に持って行くの。」などと言いつつ見せに来てくれました。

最後に、オイスカの海外研修生やボランティアが先生になり、積み木教室を行いました。ヒノキ間伐材で作られた様々な形の「積み木」三〇〇個を組み合わせ、家やアーチをつくったりと、夢中で遊んでいま



できた作品を手に記念撮影

た。自分の背丈よりも高い塔をつくる子どもには、みんなが固唾を飲んで見守りました。盛り上がったところで、オイスカ手作りの紙芝居を使って、間伐材の積み木がどこからやってきたのかを説明すると、みんな森林整備のために木を伐ることの大切さを実感したようでした。

「夏休み最後に親子で過ごす良い機会をもらいました。」と、感謝の言葉もいただきました。

なお、指導普及課では、今年の夏休み期間中に、このイベントを含め合計十六回、八〇七人を対象に森林・木工教室を行いました。

シンクメ

地域の声

「明日はきつとエコロジー、いつか生態系循環の永遠の森につながるように」

株式会社エコアス馬路村

代表者 上治 堂司



エコアス馬路村設立の経緯
高知県東部に位置する、人口約一千百人の馬路村。

古くは藩有林として、土佐藩の財政を支える等、「魚梁瀬杉」は秋田杉、吉野杉と並ぶ日本三大杉として名を馳せました。

また、往時には村内に二つの営林署が存在し、人口も三千人を超える程でした。

しかし、国有林野事業の組織再編や、抜本的改革により昭和五四年に馬路、平成一六年に魚梁瀬営林署の閉鎖がそれぞれ行われ、国有林と共に生きてきた村にとっては死活問題。

そこで、村を中心に森林をま

ること販売していく施策として、多くの村民・団体の協力を得て、平成十二年四月に第三セクター株式会社エコアス馬路村は設立されました。

「エコアス」という社名の由来は、「明日はきつとエコロジー、いつか生態系循環の永遠の森につながるように」というポリシーからです。

現在は、山での現場作業を担う事業課、間伐材を様々な商品への加工を担う加工課、営業・情報発信・総務的な仕事を担う総務企画課で構成されています。

また、高知市内には馬路村のアンテナショップ「森の情報館エコアス馬路村」があり、建材をはじめユズ加工品に至るまで、馬路村の商品の販売と、情報発信を行っています。こちらでは、馬路村の木を使って家を建てたいという施主と建築士との住宅相談会や、馬路村への住宅ツアー・勉強会を実施し、村産材の普及に努めています。

加工品の現状
馬路村産の杉間伐材を利活



海外でも評価が高いモナッカ



2006年にグッドデザイン賞を受賞

用した商品群は、現在おさらやうちわを始め、文具、クラフト品、そしてバッグと様々な種類があります。特にバッグは「monacca (モナッカ)」の商標で販売しており、和菓子の最中と形状が似ていることから、この商標になりました。

現在、都市圏のインテリアショップや、ライフスタイルショップ、ミュージアムショップ等で販売されています。また、デザイン商品を扱うネットショップでも販売される等、木製品ではなく、デザイン商品というイメージで販路を拡げています。

モナッカは、海外でも評価が高く、二〇〇六年のグッドデザイン賞を受賞し、テレビ東京の「ガイアの夜明け」など、数多くのメディアにも取り上げられました。そして、イタリア・ミラノ、ドイツ・フランクフルト、フランス・パリ等で開催されている国際見本市へ出展し、国内外への販路開拓に挑戦しています。

そして、アメリカ・ニューヨークにあるニューヨーク近代美術館(通称・MOMA)のミュージアムショップでも販売されており、モナッカの商品価値も高まりつつあります。

また、エコアス馬路村では、間伐材製品の売上額の1%を馬路村の条例で管理する「千年の森基金」に積み立てて、森林に還元し森の保全に活用しようとしています。森から生まれたものを使っていたら、日常の中で森のを感じてもらえればうれしいです。

各地の たより



四万十川で 竹のイカダに乗ろう

〈ふれあいセンター〉

四万十市立西土佐中学校では、五年前から、「四万十川で竹のイカダに乗ろう」をテーマにした総合学習に取り組んでいます。今年も、一年生二十三名を対象にふれあいセンター職員が指導にあたりました。六月二十四日は、学校で竹の



協力して伐採した竹の運搬

七月十五日は、学校でイカダを組み立てました。組み立てる前に、イカダに乗った時のケガ防止のために、木口や節をヤスリで削りましたが、想像以上に根気のある作業で閉口気味の生徒も。次に、職員が実際に組んで見せながら、組み立ての要領を説明しました。いざ始めてみると、長いロープの扱いに苦労していましたが、予定どおり四艇のイカダが完成しました。



完成したイカダ乗りを楽しむ生徒

七月二十四日は、待ちに待ったイカダ乗り体験の日。学校の近くを流れる四万十川にイカダを浮かべ、四班に分かれて次々と試乗しました。始めは、竿のこぎ方やバランスの取り方に戸惑っていましたがすぐにコツを掴み、大歓声を上げながらイカダ乗りを楽しんでいました。そして、報道陣の取材には、「広々とした四万十川のイカダ乗りは楽しかった。学習を通して西土佐の自然や森林の大切さが分かった」と答えるなど、今回の一連の体験学習を通して、地域のシンボルである四万十川の豊かな水は、上流域にある森林の豊かさからきていることに気づいてもらえたようです。

郷土の森を知ろう

〈香川所〉

七月十四日、高松市立屋島小学校の五年生百十八人が郷土の森について学習しようとして森林教室が開かれました。屋島小学校では郷土について様々な学習をしており、そのなかで、屋島の森林について学ぼうと、香川森林管理事務所に森林教室の依頼がありました。森林ふ



郷土(屋島)の森林について学ぶ

れあい担当主幹から屋島が溶岩台地でできていることや、日本で最初に国立公園に指定されたことなど、屋島の成り立ちや歴史について、また、松食い虫の被害で多くのマツが枯れたことや、森林を守るためにいろいろな手入れが行われていることなど、現在の屋島の森林の様子や働きについて教わりました。生徒たちは予め屋島の森林を調べており、「屋島で一番長生きの木は?」「屋島に全部で木は何本あるの?」など、知りたいこと、疑問に思ったことを質問し、職員が答えに苦慮する場面もありました。その後、ペットボトルを使って小学校のグラウンドの土と屋島の森林から採取した土とで吸水力の比較実験を行うと、

親子で森の生き物作り

〈徳島署〉

その違いに驚いていました。郷土の森林について学ぶことで、森林についてもっと興味を持ち、大切にする心を持ってもらいたいと思います。

七月二十六日、徳島市立佐古児童館において、当署職員二名と同地区のボランティア二名の四名で佐古校区の子供達約一五〇名を対象とした「木の枝で作る森の仲間、カブトムシ・クワガタ・クマ」などの製作と「地球温暖化と森林」などについてパネル展示による森林の大切さのPR活動を行い



楽しくカブトムシ等を作成

ました。

同館では、児童館や地区の婦人会等が中心となって、工作教室を毎年開催しており、今年で七年目、「牛乳パックで作るブーメラン」や「たまごの殻で貼り絵」など色々な催しが行われています。今回は、木の枝等を使った工作の評判を聞いた同館の館長さんから依頼があり、当署として初めて参加しました。

参加した児童や父兄からは、「かわいい、かっこいい」、「木の枝で昆虫や動物が作れるのを初めて知り体験出来て良かった」との話もあり、沢山の笑顔と歓声がこだましたイベントとなりました。

工石山クリーン

ハイキングを実施

〈嶺北署〉

七月二十七日、嶺北署管内の工石山国有林九三林班内において、一般公募者十六名、「県民の森工石山を良くする会」三名、四国森林管理局十一名、嶺北署員六名の総勢三十六名の参加者の下クリーンハイキングを実施しました。

当日は気温も高く、前夜の雨



クリーンハイキングに参加した皆さん

のせいかな湿度も高い中ではありましたが、清掃作業と間伐作業の二班に分かれて作業を行いました。清掃作業では、杖塚を中心にゴミ拾いや下草刈りに汗を流し、間伐作業では、あらかじめ整備した区域の中で将来の「美しい森林」を思い描きながら選木を行い間伐をしました。最初は一人当たり二〜三本という予定でしたが参加者の要領もよく十本以上切っていた参加者もいました。

作業終了後は、頂上の展望台で昼食をとり、休憩の後、サイの河原まで下りて、加茂信三さんによる「オオダイガハラサンショウウオの生態について」分かりやすい説明を受け、その後杖塚まで下りて閉会式を行い解散しました。作業後の現

地はきれいになり、参加者一同さわやかな汗をながして充実した一日でした。

「連合の森」で 親子森林教室を開催

〈徳島署〉

徳島県美馬市木屋平の中尾山（標高約一、〇〇〇m）にある平成荘において、「連合徳島」主催の親子サマーキャンプが七月二十六日・二十七日の二日間開催され、当署は、二十六日の親子五五組一四九名の森林教室と木工教室を担当しました。

森林教室では、プロジェクトを使い「私たちを取り巻く森林について」をテーマに森林の



親子で楽しく「カレンダー時計」を作成

公益的機能や地球温暖化防止に森林が重要な役割を果たしていることを説明した後、刈り出しや除伐作業でいらなくなった木の枝や間伐材の板、拾ってきた木の実などを材料にして、「カレンダー時計」を親子共同で一台の作成に挑戦しました。天候は、親子に試練を与えるかのごとく、時にはわか雨が降り、やんだと思ったら夕立が容赦なく降り込むなど、思い出の詰まった一日目となりました。

翌日は、最高の青空となり親子で一本、鳥や動物の餌木で昆虫の集まるコナラを植樹し、鹿などの食害から苗木を守るためのプロテクター設置と記念の杭を立てました。「カレンダー時計」を見るたびに森林の大切さと親子の絆を再確認することのできるイベントとなりました。

森と海のコラボ

「足摺海洋館で親子木工教室」

〈ふれあいセンター〉

七月二十九日、土佐清水市竜串にある高知県立足摺海洋館で親子木工教室が開催されました。この教室は、同館の活用促進を図ることを目的として



親子でクワガタ等作成

十九日から八月三十日までの各土曜日に七回開催予定で、ふれあいセンターが初回の講師を依頼されました。当日は公募による親子五組十五人が参加、職員もボランティアの方々と一緒に木工クラフトの指導に当たりました。

最初に、ノコギリ、ナイフ、などの刃物の使い方を学んだ後、クワガタ、カブトムシ、クマの置物作りに挑戦しました。

子ども達は、ノコギリの扱いがうまくいかず両親に手伝ってもらった姿もチラホラ、それでも最後には立派な作品が出来上がりました。また、なかには海洋館に相応しい海の中をイメージした「壁掛け」を作った親子もいました。約二時間あまりの教室でし



竹のイカダ作りの様子

たが、普段「親子で何かをする」ことが少ない昨今、作品作りを通じて親子がふれあう体験の助になったのではないかとと思っています。

森林環境教育の 更なる拡充を

―教職員対象の講座を開催―

〈ふれあいセンター〉

ふれあいセンターでは、学校の要請を受けて出前講座形式で児童・生徒に森林環境教育を実施していますが、昨年からは指導者の裾野の拡大を図ることを目的として、教職員の方々に対象にした「森林の楽(学)育講座」を開催しています。今年の特典は、



木工クラフトの様子

【二日目】

- 森林環境教育の重要性
- 世界の森林と川(外部講師)
- 森林と地球温暖化防止・炭素現存量の測定
- 竹の話・竹のイカダづくり

【二日目】

- 炭の話・炭焼き体験
 - 木は万能選手・木工クラフト
- などについて実施しました。座学では、熱心にメモをとったり、講師に次々と質問する場面も見受けられ、先生方の森林や環境問題への関心の高さを窺うことができました。実習では、自分たちで組んだイカダの四万十川試乗体験や、木工クラフトの時間は、大いに楽しんでいる様子でした。実施後のアンケートでは、「学校で実践できるものがあつた」「疑問に思っていたことが理解できた」等の感想があり、

今後につながる講座となったようです。また、アンケートの結果は、次回の企画に反映させることとしています。

なお、①会場②実施日③参加者数は次のとおりです。

【高知県】

- ①四万十市西土佐「四万十楽舎」②七月二十九日と三十日
 - ③二日間で十二名参加
- 【愛媛県】
- ①松野町立松野東小学校
 - ②八月七日と八日
 - ③二日間で十六名参加

親子でオリジナル 作品に挑戦

〈徳島署〉

八月十七日、徳島市立上八万児童館において親子二十一組、総勢六十一名が県産スギと間伐や除伐で発生した木ぎれなどを再利用した「エコ・オリジナルカレンダー」作りに挑戦しました。

まず、治山課長の挨拶の後、流域管理調整官が子供達を対象にパネルで木の一生と森林について森林教室を行い、その後、森林ふれあい係長が保護者に作業の注意や順序などを説明し、親子で楽しくオリジナルの作品を作りました。



親子で「エコ・オリジナルカレンダー」作りに挑戦

児童館職員の方へは、事前の製作体験により、当日はスタッフの協力を頂いたこと等から、怪我も無く順調に作業が終了しました。

参加した子供達は作った作品を前に笑顔で写真撮影に臨み、保護者の方からは、「良い作品が出来ました。準備など大変ですが来年もお願いします。」との労いの言葉も頂きました。

木の動物・昆虫作り

〈徳島署〉

八月十九日に徳島市立内町児童館において児童四十三名がサクラ・ミズメの枝でカブトムシ等の昆虫とイヌ・クマの動物



カブトムシ作り等に挑戦

作りに挑戦しました。

まず、館長さんより徳島署の紹介を頂き、次に職員が一人ずつ挨拶、最後に普段どの様な仕事をしているのかを簡単に説明し作業に取りかかりました。職員の紹介の時には全員の名前に山や木など森林に関する漢字が含まれている事に児童も保護者の方もびっくりしていました。

参加した子供達は初めての手作り工作に目を輝かせ、職員の周りに一斉に集まった子どもから、作り方などの質問が集中、汗をかきながら必死に対応する姿が見受けられました。が、予定時間の二時間ジャストで無事終了しました。

シリーズ 4 よろひびとで四国土森林管理署

足摺亜熱帯自然植物園

所在地

高知県土佐清水市

足摺山一、二四四林班イ小班

足摺岬を中心とした足摺地区と大月町大堂を中心とした大堂地区の約一、一四〇haの国有林が、太陽と海と緑の自然に親しみながら休養の場として利用できるように「足



植物園の入口



園内の遊歩道

摺・大堂自然休養林」として指定されています。いずれも海岸部の森林でそのほとんどが亜熱帯性樹木を交えた常緑広葉樹です。
なかでも、観光地としても有名な足摺岬は、毎年二月に開催される「足摺つばき祭り」で知られているヤブツバキの花のトンネルをはじめ、夏から秋にかけてハマユウやハマカンゾウが秋から冬にはアシズリノジギクやツワブキなどが咲き乱れます。
足摺亜熱帯自然植物園も足

摺大堂自然休養林の施設の一つとして、この足摺岬にあります。足摺岬の自然に親しみながら、植物に対する知識と理解を深める教養の場として利用していただくことを目的として、昭和四七年から整備が行われ、植物の生育がほぼ安定した昭和四九年八月に開園しました。

植物園は足摺半島先端部に位置し、面積は約一ha、大半が緩やかな南西向きの平行斜面となっています。植物園は全体が発達した自然林に覆われ、園内には、目通り四m高さ二〇m以上のホルトノキの巨木があり、その根元四方には熱帯で見られる板根を発達させています。



多様な亜熱帯植物

開園当時は、足摺岬の国有林に自生している植物群を中心に自然環境の中に造ったもので、約五〇〇種類の植物が植栽されていましたが、植生遷移等により、平成一八年三月時点では、一九三種類の植物が確認されています。

園内に生育する植物のうち、保全上重要な植物としては、自生種ではキノクニスゲ、タチバナの二種があげられ、足摺半島周辺から移植し、園地で保存される植物としてリュウビンタイ、カカツガユなど十一種があげられます。この他に、シヨウベンノキ、ハカマカズラ、ピロドムラサキ、オタニワタリなどがあげられます。

これら希少な植物が生育するこの植物園は、足摺岬の植物を理解するうえで、大変意義があり、また、フカノキ、イジュ、クロツグなど沖縄や台湾の亜熱帯産植物も植栽されていて、日本の亜熱帯地域の主要な植物を見ることができま

今月の主なイベント等の予定

- △十八日 森林管理局長会議 (林野庁)
- △二十日 伊予之三名島古事の森づくり (愛媛署管内サル谷国有林) (指導普及課)
- △二十四日 国有林野事業協力者感謝状贈呈式 (総務課)
- △二十七日 森林についての「はなしと木工クラフトづくり」(高知中部署)
- △二十八日 美しい森林づくりに関するシンポジウムへ高知市文化プラザかるぽーと (計画課)





平成20年度「四国山の日賞」団体決定!!

四国森林管理局（中山尊裕局長）では、平成18年度から、四国4県との間で締結した「四国の森づくりに関する共同宣言」（平成16年11月）の趣旨に沿って、四国の森林等をフィールドとして**四国の森づくり活動**（森林整備、木材利用及び森林環境教育の推進）に積極的に取り組んでる団体を「**四国山の日賞**」として選定、表彰しています。

今年度も、4月から6月にかけて四国の森づくり活動に積極的に取り組んでいる団体を募集したところ、四国4県から**18団体の応募**があり、先日、林業関係者、環境教育者やマスコミ関係者等からなる「四国山の日賞選考委員会」において、厳正かつ公正な審査を行いました。

その結果、次のとおり**9団体**（森林整備分野：2団体、木材利用分野：2団体、森林環境教育分野：5団体）を今年度の**四国山の日賞**と決定しました。

なお、決定した団体の表彰は、11月1、2日、高知県香美市ほきがみねしんりんこうえん甫喜ヶ峰森林公園外で開催される「四国山の日inこうち」の会場（表彰は11月2日、ほきがみねしんりんこうえん甫喜ヶ峰森林公園）において行います。

森林整備分野

- ◇森の応援団・さんりん倶楽部（高知県）
- ◇ニッポン高度紙工業株式会社（高知県）

木材利用分野

- ◇有限会社岡松自動車钣金（高知県）
- ◇梶原町森林組合（高知県）

森林環境教育分野

- ◇東みよし町立絵堂えどう小学校（徳島県）
- ◇西井川林業クラブ（徳島県）
- ◇フォレストーズかがわ（香川県）
- ◇えひめ森の案内人会（愛媛県）
- ◇香美市立大柄かみ おおどち小学校（高知県）

ようこそ「森林(もり)の達人集」をホームページに掲載しました



指導普及課

1 趣 旨

四国森林管理局では、木の枝や葉、かすら等の自然の材料を用いた遊び、林内、木、溪流などといった森林をフィールドとした遊び、活動を得意とする名人達を「森林の達人」としてデータベース化し、多様化する森林環境教育への要請に弾力的かつ機動的に対応していくため、8月6日から、ようこそ「森林の達人集」の運用を開始しました。

2 内 容

- (1) ①体験活動、②調査研究活動、③林業技術、④物づくりの4分野で構成
- (2) 4分野の活動地を、①森林、②里山、③校庭や空き地、④教室・公民館 ⑤研究機関・工場とし、活動地に応じて開催できる102のプログラム例を掲載

3 利用方法

局ホームページのメニューから、ようこそ「森林の達人集」を選択してください。
詳細は別紙「森林の達人」に出会えるまでのシステムを参照してください。

4 「森林の達人」キャラクターの「こだまくん」と「このはさん」がホームページ上でご案内します。



こだま このは

わたしたちが案内します
よろしく